

者は、逆にそのような事例を挿入することによる読者の理解の混乱を避けたのかも知れず、評者としてもテキストの意味をも含む書物の内容構成のむずかしさを感じている。

地理学の啓蒙的な役割を担うテキストは、あくまでも平易な表現を用いることによって読者の理解を深めることにおいては「テキスト」に徹することも必要ではある。しかしながらその一方で、内容構成においては専門分野の高度な知識の一般化と社会への伝播も求められていると思われる。本書の企画はまさしく地理学の専門分野の分野単位のテキストであり、大学においてのみではなく、広く社会に対しても訴えるものでもある。既に欧米においては、このような企画で刊行された地理学選書も多く、また選書でなくとも地理学専門分野の優れたテキスト的刊行物が多い。

わが国では、多くの専門分野の地理学者により編集された一般教養課程用のテキストはかなりあり、それらはそれなりに地理学の動向や成果を紹介することにおいて重要な役割を持っていると思われる。しかし専門課程に入って一つの分野に興味を絞り込んで学ぼうとする学生にとっては、専門書でありながらしかも専門分野の入門書的存在の書物が、分野によって偏って存在しているように思える。例えば社会地理学に興味を持った学生（あるいは一般読者）に最近の書物としては P. ジャクソン・S. J. スミス著 浜谷正人訳 (1991)：『社会地理学の探検』やボール・ノックス著 小長谷一之訳 (1993)：『都市社会地理学(上)』などの優れたテキストが翻訳されて、それらが非常に有意義に活用される書物が刊行されている。また、都市内地域構造研究に興味を持った学生には、古くは（もちろん現在においても高い利用価値がある）石水照雄 (1974)：『都市の空間構造理論』から林 上 (1991)：『都市地域構造の形成と変化』などに至るまで多くのテキスト的存在の専門書がある。それに対して、メンタルマップ研究に関してはそのような存在のテキストは見あたらず、授業においてこの分野の話をしようとする時には、ケヴィン・リンチの書物の訳本などいろいろな書物から引用してくる必要があった。

そのような点からも本書は、地理学の専門分野別に企画されたシリーズもののひとつとして、大学で講義を受ける学生全体や一般社会の読者はばかりでなく、メンタルマップ研究に興味を持つ地理学専攻の学生のテキストとしてメンタルマップ研究の意義やメンタルマップ研究の動向、研究事例の紹介という、両方へのアピールを担うという重要な役目を果たすものである。

同時に、二極化した読者を相手に想定して内容を理解し易く構成することのむずかしさを考えさせられるものでもあった。どちらかという、平易で分かりやすく工夫された表現や内容構成から、読者を一般社会というよりも、恐らく読者の大部分を占めると思われる大学の教養課程で地理学を学ぶ学生のためのテキストとしての色彩が強いように感じた。

地理学の優れた成果を広く一般社会にアピールするためには、例えばこのメンタルマップの分野であれば、読者の中にもかなりの数があるとみられる教育分野への貢献を意識して子供の認知空間の発達に関するペシを増やすなどが考えられる。評者は、中学校の社会科学教育においていまだに世界と日本のどちらを先習にするかなどという議論がされているのを聞く時に、なんとかメンタルマップ研究の成果が反映されないものかと強く感じていた。いずれにしても本書は、メンタルマップ研究に興味を持った者にとって、わが国においてこの分野の初めての貴重なテキストであり、メンタルマップ研究のアピールとしてはもちろん、著者が意図する新しい地域認識論への契機として、その意義は大きい。一読をおすすめする。

(由井義通)

ウォーラーステイン著 丸山 勝訳：
ポスト・アメリカ
——世界システムにおける地政学と地政文化——

藤原書店, 1991, 385 p., 3800円

資本主義経済体制の危機が叫ばれる今日、世界情勢に関してこれまで「世界システム分析 The World-Systems Analysis」を掲げ、歴史的分析を行ってきた I. ウォーラーステインの現代世界に関するエッセイがまとめられ、英邦同時刊行という形で発表された。本書は、著者が1981年から1989年にかけて発表した諸論考を収録したものである。地理学にもなじみ深い「地政学 Geopolitics」をタイトルに掲げ、1500年以来拡大してきた唯一の史的システムである資本主義世界経済という近代世界システムの構造的危機を予測するエッセイ集である。そして本書はタイトルからも伺えるように、「地政文化 Geoculture」という造語によってウォーラーステインが「文化」に対して取り組んだものである。

本書の構成は以下の通りであり、括弧内は個々の章を成しているエッセイの初出年である。

アメリカの花道—湾岸戦争をめぐって (1991年, 特別寄稿)

はじめに—1980年代の教訓 (1990年)

第Ⅰ部：地政学—ポスト・アメリカの世界

第1章 衰退する北大西洋主義 (1982年)

第2章 レーガンの疑似革命 (1987年)

第3章 日本と世界システムの将来の軌道 (1987年)

第4章 欧州の統合と国家間システムへの含意 (1988年)

第5章 1968年 (1988年)

第6章 マルクス, マルクス・レーニン主義, 近代世界システムにおける社会主義の経験 (1989年)

第7章 ブラント報告 (1981年)

第8章 世界システムにおける危機の類型分析 (1984年)

第9章 資本主義世界経済—その中期的展望 (1988年)

第Ⅱ部：地政文化—地政学の内面

第10章 民族的・国際的アイデンティティと国家間システム (ピーター・P. フィリップスとの共著, 1985年)

第11章 近代世界システムのイデオロギー闘争の場としてみた文化 (1989年)

第12章 民族性と普遍性 (1989年)

第13章 「南部」の文化が意味するもの (1988年)

第14章 文明としての近代世界システム (1984年)

第15章 蘇る文明への関心 (1987年)

構成からも分かるように本書は「地政学」に関わる第Ⅰ部と、「地政文化」に関わる第Ⅱ部に分かれている。そしてとりわけ、第Ⅱ部に力点が置かれているようにも思われる。第Ⅰ部はその前段階としての世界システム分析の説明と捉えてよからう。よってここでも第Ⅱ部を中心に論じることにする。

そのためにも、著者自身の「地政文化」に関する定義づけについてまず触れておく。地政文化とは地政学とのアナロジーに従って用いられており、「世界システムが作動する文化的枠組み」(p. 36)を意味している。地政文化に関しては三つの課題が提示されており、それぞれ①経済・政治の形式を変えることで世界を変革する方法は有効でなかったとし、「文化」に新たに知的焦点を当てること、②普遍性の仮面に隠れた人種差別主義、性差別主義が、政治との関連性において反普遍主義闘争を生む原因になったこと、③「新科学」をめぐるものであり、近代世界システムの最も古い知的支

柱であるベーコン＝ニュートン科学に関する直接的な批判、である。

本書はウォーラーステインがついに現代を語ったものである、と評価するべきであろう。著者はこれまで歴史的事実に対して常に新しい解釈を提供してきたといえようが、本書、そして本書と同時期に発表された『脱＝社会科学 *Unthinking Social Science*』(ウォーラーステイン, 1993)とをみると、その歴史的分析はすべてこの現代の危機に対処するための前段階であると理解できる。こうした意味で、本書は重要な問題を論じているのである。

まず彼の主張に沿って、この近代世界システムの今日の状況を概観してみよう。著者の学説に影響を与えているものといえば、以下の二つであることは周知のことである。まず第一に、個々の歴史的事件より、長期的に持続する性質を重視し、歴史的時間を三つのレベルに分類したフェルナン・ブローデル。そして一国を単位とする経済分析を批判し、現代における第三世界諸国の低開発たる原因を先進資本主義諸国の成功へと求め、資本主義分析を世界スケールに拡張した「従属理論」、この二つである。

著書によれば、資本主義世界経済は今日、中期的観点からみれば、コンドラチェフの景気循環波動説のいうB局面に当たっており、下降傾向にある。それは17世紀末のオランダ、19世紀末のイギリスの覇権の終了と並んでアメリカの覇権が終わりを告げようとしているのだという。また長期的観点からみれば、1500年以来拡大を続けてきた資本主義世界経済という近代世界システムが初めて直面している構造的危機の状況にあるという。多くの者はこの危機に対して、短期的な観点のみで対応をしようとするのだが、歴史的経験からこうした短期的な観点のみの対応を戒める。著者にとって、「危機」とは「ある稀な状況を指す時に」(p. 176)用いている概念にすぎず、「その危機は構造的なものであり、善悪ではない」(p. 186)という。一方中期的観点のみから言えば、アメリカに対して二つの継承候補国として日本と西欧が挙げられ、日本が勝者であろうと予測することもできるが、長期的観点を考慮するとそうした結論は早急であるという。今日の状況は、既に述べたように構造的な危機に直面しており、この現在の世界システムが、別個の一つ、もしくは複数の史的システムに転換してゆく可能性のある時期であるという。そうした移行期における「秩序の崩壊は、同時にイデオロギーの崩壊でもある」(p. 86)のであり、よって政治経済の構造分析のみでは不十分なのである。

特に本書で著者は、19世紀、そして現代の反システム運動の検討を行う。19世紀には、「社会運動」と「民族運動」という二つの反システム運動が誕生し、前者がブルジョアジーによるプロレタリアートの抑圧、後者が支配集団による被支配民衆の抑圧という点に重点が置かれていた。そして、双方とも「平等」を実現することを目標にしていたという。そしてこれらは共産党、社会民主主義政党による国家権力の奪取という形を取る運動であった。

それに対し、1945年以降の「新しい」社会運動は種々の組織の形態をとる。例えば、女性運動や反戦運動、エコロジー運動であり、社会主義国においては中国の文化大革命やソ連のペレストロイカなどであり、また宗教再生運動である。そしてこうした運動に共通するのは、「権力を握った「既成」の運動に対する根強い不信感である」(p. 191)。そして著者はこうした諸運動の危機と科学の危機とを同等に扱い、将来の来るべきシステムは、こうした危機の解決と相関し合っているという。

そして著者はプリゴジン・スタンジュールの著作『混沌からの秩序』(プリゴジン・スタンジュール、1987)に準える形で、「真に新しい秩序が創出されるまでの間は、混沌状態が進行するはずである」(p. 222)と断言し、長期的には大いに希望が持てるとし、「相対的に平等で、相対的に民主的な世界秩序の創出に進むであろう」(p. 222)と述べている。

では、著者が実際どのような予測を立てているのか、第Ⅱ部の議論を詳細に見ていきたい。

まず第10章においては、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』からの引用に始まり、近代世界の持つ両面性、すなわち「民族主義と国際主義、普遍性と独自性との間に絶えず存在する緊張」(p. 228)に関する議論を展開する。この緊張は、資本主義世界経済という単一の社会的分業の中に複数の国民国家が存在するという矛盾が原因で生じているという。そもそも民族主義が今日的意味を持ちえるのが、19世紀以降の近代国家の成立(国内における文化の均質性に起因している)を基礎としており、また普遍主義も啓蒙運動や社会科学における実証主義の形を取ってきたのである。国際主義というイデオロギーは、国際連盟という組織において実験される。そこでは近代世界において、なお自立できない民衆は先進諸国の保護下におかれるものとされた。このことは、社会科学内での「社会歴史進化論(ドイツ国家学や地政学が含まれる)」と方向性を一にするが、同時に人種差別主義へと結びつく。それは

また、世界経済の地理的拡張と重なり合い、民族主義は反システム運動としての機能を果たす。ウォーラーSTEINの世界の三層構造でいえば、民族主義は半周辺地域で起こっており、中核諸国では普遍性の追求が行われている。

第11章から「文化」へのアプローチが始まる。まず「文化」という語について、史的社会科学内での二つの用法による混乱の整理がなされる。文化・用法Ⅰは、人類学において「普遍的でも特有でもない特質」を示すときに用いられる「集団アイデンティティ」として定義される。文化・用法Ⅱは、「物質的なものに対する象徴的なもの」として定義される。しかしながら、ウォーラーSTEINにとってこのどちらの用法も有用でない。著者はむしろ、近代世界システムの中でこうした用法を伴った「文化」がいかに展開してきたかを、資本主義世界経済の六つの矛盾について見ていくことになる。それぞれの点について詳述することはできないが、近代世界システムの拡張期に重なり合って出現した「世界人権宣言」などの人類愛的な普遍的イデオロギーは、同時に主権国家内での市民権の原則を含んでいる。すなわち、全ての国家が発展することが可能であるという意味で平等主義的なのであるが、今日存在する不平等はそれぞれの国家に起因するという人種差別主義にとって代わられる。こうして普遍主義と人種・差別主義という一組の文化的イデオロギーは世界システムの緊張を封じ込める強力な手段となってきたのである。それに対抗する「反システム運動」の存在は一定の意味を持つてはいたが、しかしながら、それらの運動はやはり同じイデオロギーの矛盾(排除されたものを保護するのか、解放するのか)を乗り越えることはできなかった。結局「現在の世界システムには、文化的な意味での何らかの「手術」が必要」(p. 292)なのである。

第12章でも引き続き、「民族性と普遍性」というテーマで議論が展開される。「文化」という概念(用法Ⅰ)は特定の集団を同一化すると同時に、他者を排除する。その一つが民族主義である。それに対し、国連が採択した世界人権宣言という主張が存在する。ここで著者は「世界文化といったものが存在を認められるか」(p. 294)という設問を立てる。先にも述べられているように、民族主義は比較的最近の創造物である国民国家を基礎単位としており、また一方での文化的な意味での世界システムの拡張による世界中の文化の均質化の進行が普遍主義を強化している。次に、普遍主義と民族主義との間の矛盾から生じる国民国家内の

「マイノリティ集団」の存在,そしてエリート文化と大衆文化との対抗関係が指摘される。しかしながら,そうした文化抵抗は多くの場合組織的・計画的であり,政治抵抗運動と同様の自己矛盾に陥っている。むしろ世界の強者達は文化抵抗それ自体を商品化し,その私的な領域を半公的なものに転換してしまう。また一方の「個人主義的」文化抵抗は,当然のことながら組織力を持たない。こうした矛盾の結果,近年においては「科学」と並行した普遍主義が優勢となっている。それは巧みにも,「独自なるものを經由して普遍的なものに至る」(p. 313)のである。この問題に対する著者の態度は慎重であるが,「世界文化」も「独自文化」も解決にはならないという。我々の世界に「長期の平衡状態などは本来ありえない」(p. 315)のである。

第13章は,アメリカ「南部」についてのいくつかの言説を通じて,再び「文化」の語義の追及を行っている。南部諸州は否定的にも肯定的にもある意味で他者を表象しており,そこで文化という概念は,南部を一つの社会類型として構成する役割を果たしてきた。あらゆる史的システムにも組織があり,組織に対応してシステムを総合的に作動させるルール,規範,価値体系があり,何らかの形で逸脱を部分的に押さえ込む役割を果たす。まさに「南部」は南北戦争によってアメリカ合衆国の一部になったのである。本章に関しては,シルク・シルク(1992)が具体例を提供してくれる。しかしながら,そうした封じ込めの方で,反システム運動としての多くの「文化」が生まれ,「独自主義」の復活が促されると予測されている。

第14章では,「文化」に代わって「文明」という語に焦点が当てられる。まずは「文明」の二つの語義としての単数形と複数形について説明される。単数形の文明は「人間をより「開花」してゆくプロセス」(p. 340)として,普遍的なものとして説明される。日本語の「文化」も,この意味における「文明開化」として大正期に多く用いられたのである(西川,1993)。複数形は複数の文明の共存を「中立的」に認める相対主義的な概念である。単数形は「合理的で経験的な科学」の知的勝利の表われ」(p. 342)として,近代世界システムの拡張に大いに貢献してきた。それに対し,「複数形はまさに資本主義世界経済に対する反システム運動」(p. 353)として機能してきたのである。しかしながら,ここまで何度も主張してきたように,相対主義や民族主義としての反システム運動も世界システムの^変動には至っていない。ここで著者は三つの可能性を提示する。第一が1500年以前の状態への回帰であるが,これはあ

りえそうにない。別の二つの可能性は,現在の史的システムの改変であり,可能性は高いという。しかしどのような未来が望ましいのであろうか。その一つが,過去に経験してきたシステムと同様の階層的な不平等システムである。これは極めて現実的である。もう一つの未来は,これまでの多くの者が夢見てきた,平等で民主的なシステムである。そのどちらを我々が目指すべきかという議論においては,技術的なプロセスと同時に,意識的なプロセスの分析が必要である。しかしながら著者は,未来に対する適切な回答を出すことは誰にも不可能であるという。こうした問題は個人の洞察力の問題ではなく,反システム運動という社会的実践の問題であるという。システム論に依拠する著者にとっては,未来は不確定なものであり,我々の前進は慎重であるべきなのである。

最終章においても,続けて文明論が展開される。やはりここでも普遍主義と人間主義論との論争が指摘されるが,この論争の今日の意味は,「普遍主義への挑戦が科学の内部から,科学的根拠に立って,仕掛けられている点」(p. 369)にあるという。それは主としてプリゴジンの議論に依拠している。こうした意味において,ニュートン流の発想である文明・単数形に対して,文明・複数形はプリゴジン流の発想ということになる。しかしここでいう文明・複数形は,「過去に対する現代の権利主張」(p. 372)として定義される概念であり,著者は興隆し,没落したのは文明ではなく,世界帝国であったと主張する。現行の資本主義世界経済が今日分岐点に近づきつつあり,世界システムにおいて,文明上の権利主張が政治的に再生し,史的社会科学が「文明」概念に関心を抱いているという状況において,我々の集団としての行動がきわめて重要であるという。しかし,些細なインプットとしての我々の行動が,アウトプットの大きな変化をもたらす可能性があるという意味において,我々の行動は慎重でなければならない,ということになる。「過去の史的システムの機能態様を,直線運行型の普遍主義という歪んだレンズを通さずに追求することが,闘争の必須の要素であると言いうるであろう。」(pp. 374~375)と著者は結んでいる。

評者には本書の正当な評価はできないが,Taylor(1993)が指摘するように,いくつかの問題点が存在する。まずエッセイの再収録ということもあり反復が多いこと,そして看過することのできない核戦争や環境問題といった事例を扱っていないこと,そして結局,文化や文明といった概念の有効性や,両者の関連が明確にされていない,といった点である。しかしながら,

Taylor (1993) が本書をフランシス・フクヤマのベストセラー『歴史の終わり』に対する解毒剤と評しているように、現代世界に関するいくつかの言説とともに参照されるべきものであろう。

そして我々は学問的に中立な立場からではなく、研究者としての我々の立場、研究対象となる地域や社会(集団)の立場、そして我々が訴えるべき人々の立場を明確にしつつ、グローバルスケールでの分析に着手すべき時期なのである。

文 献

ウォーラー・ステイン著、本多健吉・高橋章監訳 (1993): 『脱=社会科学-19世紀パラダイムの限界』藤原書店, 444 p.

シルク・シルク著、原田ひとみ訳 (1992): 人種主義、ナショナリズム、地域神話の創造: アメリカ南北戦争以後の南部諸州。バージェス・ゴールド編著、竹内啓一監訳: 『メディア空間文化論-メディアと大衆文化の地理学』古今書院, pp. 203-231.

西川長夫 (1993): 国家イデオロギーとしての文明と文化。思想, no. 827, pp. 4-33.

ブリゴジン・スタンジュール著、伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳 (1987): 『混沌からの秩序』みすず書房, 407 p.

Taylor, P. J. (1993): Review of Wallerstein, L.: *Geopolitics and Geoculture*. *Transactions of Institution of British Geographers* N.S., vol. 18, pp. 405-406.

(成瀬 厚)

高橋春成: 荒野に生きる

—オーストラリアの野生化した家畜たち—

どうぶつ社, 1994, 101 p., 1800円

ラクダ: 2万頭, スイギュウ: 35万頭, ブタ: 300~600万頭, ヤギ: 200万頭以上, ロバ: 150万頭以上, ウマ: 60万頭, この圧倒的な家畜の数を想像することができるだろうか。ちなみに広島県のブタの飼養頭数は7万7千頭, ウシの飼養頭数は5万4千頭 (1992年, 農林水産省統計表による) である。この膨大な家畜頭数はオーストラリアで野生化した家畜の推定生息数である。本書はこれらオーストラリアの野生化した家畜たちを対象にして, 人間活動と生物環境のかかわりを考えさせる好著である。

本書は第1章 在来動物と侵入者たち, 第2章 野

生化した家畜の王国, 第3章 野生化した家畜の有害性と活用面, から構成されている。第1章では1770年に始まるヨーロッパ人の入植までのオーストラリア大陸の哺乳動物の略史に触れ, 第2章ではラクダ, スイギュウ, ブタなど様々な野生化した家畜たちの紹介と野生化の背景が述べられる。背景とは具体的に飼育の粗放性, 解き放ち, 不慮の事故である。第3章では在来種に対する有害性と人間の経済活動に対する有害性, および狩猟対象, 再飼育, 観光資源としての活用面に続いて, これら野生化した家畜の管理にかかわる問題点が議論される。

第1章はそれに続く第2章, 第3章の導入部で, わずかに8項と紙数も少ないが興味ある事実が述べられている。それは本書が取り上げている家畜の野生化という現象の始まりについてである。そもそも, オーストラリア大陸の在来動物はカモノハシなどの単孔目や, コアラやカンガルーなどの有袋類に代表される古いタイプの哺乳類で, 海洋という障壁が新しいタイプの哺乳類の侵入を拒んできたのだ。家畜の野生化とは, そこへイヌやウシなどの有胎盤類といわれる新しいタイプの哺乳類が進入する過程でもあった。しかしこれらの動物たちが自らそれまでの障壁を乗り越えてオーストラリア大陸に侵入してきたわけではない。文明を身につけた人間たちによって連れてこられたのである。その意味で, オーストラリア大陸に侵入した最初の有力有胎盤類は人間だったのである。家畜の野生化は, 在来動物の中への新しい有胎盤類の侵入過程と考えることができる。しかし, オーストラリア大陸における侵入の端緒は人間によって開かれたのであり, はからずも我々人間の自然に対する営みの歴史, あるいは文明論をも想起させるのである。

第2章は具体的な家畜の野生化についての章で, 11種類の家畜の野生化の経緯, 生息域, 生態などが多くの写真を取り入れながら記述されている。これらの家畜は, 乾燥地域のラクダ, 熱帯湿潤地域のスイギュウなど各々が広大なオーストラリア大陸の種々の気候環境に適応して生息域, 生息頭数を増やしている。例えば19世紀後半にオーストラリア北部に持ち込まれたスイギュウのうち遺棄, 逃亡し, 野生化したと考えられるのはわずか20~50頭にすぎないといわれているが, 1985年の推定生息数は35万頭にのぼるといふ。このように野生化した家畜が新しい居住地で生息域を広げた背景には有力な肉食獣がいなかったこと, 病気の少なかったことが挙げられているが, 家畜の野生化は決して家畜の意志によって行われたものではない。そこに